

# 服のチカラ

世界を良い方向に変えていく



06 世界中のあらゆる人に、  
「本当に良い服」を。

MADE FOR ALL



UNIQLO



世界を良い方向に変えていく

## 服のチカラ

# 06

表紙の写真: ネパールの難民の少女

## CONTENTS

- 04 いろいろな所で生まれる  
さまざまな服のチカラ
- 06 つくっているのは、誰？
- 08 「本当に良い服」が生まれる場所
- 10 お店の中の服のチカラ
- 12 服のチカラの行方
- 14 社会にとって価値ある  
企業であり続けるために

## 世界中のあらゆる人々に、 「本当に良い服」を、服のチカラを

ユニクロは、世界中のあらゆる人々に「本当に良い服」をお届けするために、世界中で事業を展開しています。毎日、さまざまな価値観のお客様がご来店され、従業員の国籍や個性もいっそう多様化しています。そうした面から言えば、ユニクロは、ビジネスのスピードを世界に向けて加速し続けているのかもしれませんが。

でも、その一方でふと立ち止まって考える、ということも多々あります。「もっと服にできることはないか?」、「服にはこんなチカラもあったんだ」。そんなこれまで考えてもみなかった服の可能性について、改めて気付かせてくれるのは、お客様のなにげない一言や、難民キャンプでの出来事の場合もあります。あるいは冊子「服のチカラ」に寄せられたお声の中から、ということも。

本冊子「服のチカラ」では、私たちの活動や服への想いについて、まずはお伝えしていきます。そしていろいろなご意見をいただくことで、新しい服の可能性を、みなさんと一緒に見つけていきたいと思っています。服ができることとは、服のチカラとは何か。服には、私たちの想像を超えたチカラがあると信じています。



# いろいろな所で生まれる さまざまな服のチカラ

ユニクロの年間生産枚数は約6億着。

全世界944店舗で販売し、1年間にご来店されるお客様は全店合計で約2億人。

お客様のもとで不要になった服は回収し、世界の難民キャンプなどに届ける。

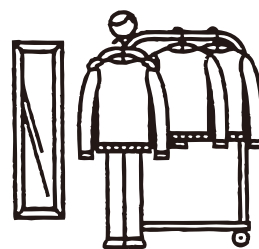
服は、生まれてから最後にその役目を終えるまで、たくさんの人の手を旅します。

つくる人の働きがいや、着る人の楽しみ、

あるいは次に着る誰かのことを考える優しい気持ちなど、

多くの人のもとで、それぞれの想いが掛け合わさっていくことで、

さまざまな服のチカラが生まれていきます。



## WEAR

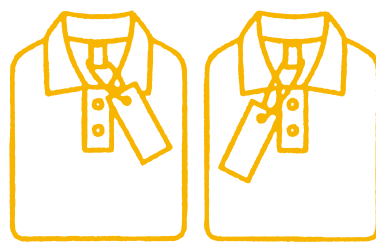
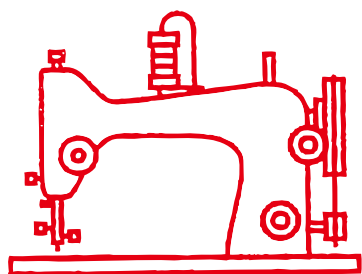
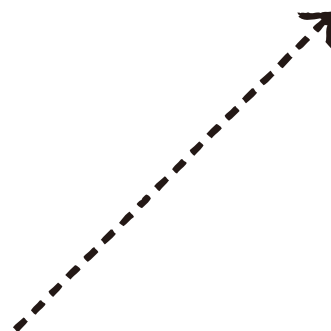
大切に長く着ていただく

服は、防寒・防暑といった基本的な機能だけではなく、おしゃれを楽しむ、自分らしさを表現する、体型をカバーするなど、たくさんの役割もっています。またお気に入りの服を着るといつもより積極的になれる、自信がもてるなど、気持ちの変化もあると思います。ご購入いただいたユニクロの服が、お客様のもとで大切に長く着られることを願っています。

## RECYCLE

ご不要になったら戻していただく

お客様のもとで不要になった服は、ユニクロ店舗までお戻しください。お戻しいたいただいた衣料のうち状態の良いものは、世界の難民・避難民キャンプへ寄贈（約9割）、もう着られないものは繊維化リサイクル（約1割）をしています。これまでの回収枚数は約900万枚を超えました。引き続きご協力をよろしくお願いいたします。



## MAKE

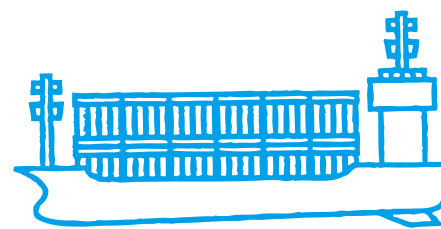
つくる

ユニクロの服は、中国やバングラデシュなど、アジアを中心とするパートナー工場生産しています。年間生産枚数は約6億着。仕事の少ない地域では、雇用機会の創出にもつながっています。またつくる工程においては、商品の安心安全はもちろん、工場働く人の労働環境が適正であるかにも配慮し、その改善・向上に取り組んでいます。

## SELL

売る

ユニクロの店舗数は、全世界で944店舗。店舗スタッフの数は約4万人にのぼります。中には、正社員もアルバイトもいます。年齢や性別、国籍も違う人や、障がいのある人など、いろいろな人がそれぞれの個性を活かして一緒に働いています。またスタッフだけではなく訪れるお客様も実にさまざま。たくさんの価値観が行き交う店舗では、毎日たくさんの服のチカラが生まれています。



## SEND

届ける

服の価値を最後まで活かすために、お客様からお預かりした衣料は、世界の難民・避難民キャンプにお届けしています。これまでに、世界17カ国に約312万枚を寄贈。ユニクロの従業員も現地に赴き、服が服として活かされていることをしっかり見届けています。難民キャンプでの服は、ケガの防止や衛生面の改善、あるいは子供たちが学校に行ったり、女性が社会に参加したりするきっかけにもつながっています。世界に3,000万人以上といわれる難民・避難民に1人に1枚、ユニクロの服を届けることを目指しています。



## つくっているのは、誰？

ユニクロの服は、品質基準と労働環境基準の両方に賛同いただいたパートナー工場で生産しています。

高品質な商品を安定的につくるのは、それほど簡単なことではありません。

今回は、そんなパートナー工場の1社を訪ねました。

上海から車で3時間。江蘇省の金壇(ジンタン)という小さな街にその工場があります。広々とした敷地は緑で覆われ、真ん中には大きな池。水辺を囲むように建屋や宿舍が並ぶ様子は、どこか大学のキャンパスのようです。昼休みになると、色とりどりのダウンジャケットにジーンズといったファッションの若い従業員たちが、おしゃべりしながら賑やかに食堂に向かいます。「冬になるとね、池に野鴨が来るんですよ。その姿を見ると、うん、水は清潔に保てているなって安心するんです」。中国の代表的なアパレル生産企業のひとつ、晨風(チェンフェン)グループCEO、尹国新(イン・グオシン)さんの表情はいつもおだやかです。

尹さんが故郷のこの街で縫製工場をはじめたのは17年前。ユニク

ロとの取引は14年になります。当時、まだお互いに小さな会社でした。今ではグループ全体で7,600人の従業員が働き、年間3,800万着の服を生産する企業になりましたが、それでも尹さんの仕事ぶりは変わりません。時間をつくっては工場内を歩き回り、笑顔で従業員に声をかけ、時にはボタンの付け方を厳しくチェックします。現場からアイデアが出れば、ポケットからノートを取り出してメモし、すぐ実行に移す。そうやって一歩ずつ、確実に品質を高め、厳しい競争を勝ち抜いてきました。

「見てください。素晴らしい従業員たちでしょう?こんな優秀な従業員に恵まれて私は本当に幸運です」。現場を見つめる尹さんは本当に幸せそうです。魅力的な仕事環境とおいしい食事、よそ

の会社に負けない賃金。それらがあれば力のある人材が長く働いてくれて、技能が向上し、より高品質な商品ができる。尹さんはそう考えています。

「ユニクロとこんなに長く一緒に成長してこれたのは、何がなんでも品質第一というこだわりが共通していたから」と尹さんは言います。「ユニクロの目標は世界一のカジュアル企業でしょう。だとしたら私たちは世界一の縫製会社になります。そして世界一の商品をみなさんにお届けします。それが私の夢です」。こんなパートナーがいることが、ユニクロのひそかな誇りです。



尹国新(Yin Guoxin)  
1964年、中国江蘇省金壇市生まれ。  
1967年設立の晨風(CHENFENG)グループCEO、  
日本の国会議員に相当する第11期全国人民代表、  
中国紡績品輸出入商会副会長。



年間総生産枚数

約 **600,000,000** 着/年



## 「本当に良い服」が生まれる場所

ユニクロの服は、どこで、誰が、どんな環境でつくっているのか？

またつくっている人はどこに住んでいて、休みの日は何をしているんだろう？

パートナー工場で働く人のオン・オフの様子をご紹介します。

## WORK

始業は8時30分。1日の労働時間は約8時間で、裁断、縫製、検品など、それぞれの持ち場に分かれて仕事をします。

中国・金壇市にあるパートナー工場では、約2,300人が働いていて、

毎月の生産高は約90万点。品質を高めるために、

最新鋭の機械を導入する一方、検品、アイロン、たたみなど、

人の手や技術でなければならない作業も多くあります。



品質を左右する縫製は、スピードと正確さが問われる。ユニクロの縫製についての基準では、誤差は0.5ミリ以下。布をひっぱりすぎて仕上がりの長さが異なることがないように、注意をはらいながら各パーツを縫い合わせていく。



色柄がそろおうよう、1枚のシャツは同じ反物から裁断したパーツでつくる。また裁断したパーツは、1枚1枚にナンバリングして管理する。



(株)ファーストリテイリング商品本部 生産部  
縫製技術・匠チーム 匠 石塚剛さん

この業界で40年以上になります。服の品質を最終的に決めるのは人の技。大切なのは機械ができることと、人にしかできないことを見極めることです。たとえば、シャツのボタン付けは機械でも可能ですが、糸の始末は、機械ができるのは0.5ミリまで。ユニクロの基準である0.2ミリは、人の手でひとつひとつカットして実現しています。若い従業員のみなさんの成長が速いので、毎日とても楽しく仕事をしています。

## LUNCH TIME

ランチタイムは、12時前後から1時間半ずつの交代制。工場併設の大きな食堂でとります。

1食あたり約3〜4元(約40〜50円)程度。お給料とは別に、

お昼代も工場から支給されるケースが多いようです。



ボリュームたっぷりのおかず類は、パワーの源。午後に備えてしっかり食べる。

めんやご飯の主食とおかず2〜3品が平均的。異なるおかずをとって、みんなでシェアする仲良しグループのテーブルも。

## DORMITORY

従業員のほとんどが工場併設の寮で生活しています。実家に帰るのは年に3回という従業員も多く、地元に残してきた家族と、毎晩、携帯電話で話すのを楽しみにしている人もいます。



1室4〜6人。ベッドの周りは趣味や好きなのもので飾られている。



劉 吉偉さん(19歳) Liu Jiwei

湖北省の出身で、学校を出て1年前にこの工場にきました。会社の寮に住んでいます。4人1部屋で、とても仲が良いから楽しいですよ。自分がつくっているシャツは生地とても光沢があってカッコいいので、お金が貯まったら自分でも買いたと思います。この会社でしっかり技術を身に付けて、将来は独立して商売をするつもりです。



劉 伍妮さん(26歳) Liu Wuni

内陸部の河南省の出身で、この工場に来て5カ月ほどになります。3歳の息子は故郷で両親に面倒を見てもらい、働きにきました。子供に会えないのは寂しいですけど、旧正月やメーデー、国慶節の休みには会えるので大丈夫です。この数カ月でますますいぶん大きくなったみたいです。しっかり働いて、子供に良い教育を受けさせるのが私の夢です。



## お店の中の服のチカラ

ユニクロの店舗は、現在、世界11カ国944店舗に広がっています。

さまざまな個性をもつスタッフが一緒に働き、多様なお客様が訪れる店舗。

耳を澄ませば、服が自信と勇気をくれたり、接客への意識が変わったり、

いろいろなエピソードが聞こえてきます。

### Nippon Meeting

ユニクロの店舗では、毎朝オープン前に、スタッフ全員で朝礼を行います。本部からの連絡事項や商品の在庫状況、またお客様からのお問い合わせが多い内容について情報を共有します。国内はもちろん海外の店舗でも「Nippon Meeting」として、実施しています。

西武飯能へべ店(日本)

大岐ミッシェルさん

車いすの女性がお母様とご来店された際、お母様の方から「娘と一緒に服を選んでいただけませんか?」とお声掛けいただきました。最初は緊張されている様子でしたが、好みの色や形、よく出かけられる場所などを伺いながら店内を歩いているうちに、少しずつ笑顔が増え、鏡の前では車いすから立ち上がられることも。ふと気が付くと、お母様もとても嬉しそうな表情をされていて。帰る時には「また来ますね」とお二人とも明るい笑顔を見せてくれました。

Times Square店(韓国)

金午敬さん

ある日、女性のお客様からお声掛けいただきました。コートの色に大変悩まれているとのこと。そこで、たくさん試着いただいた中でも、一番お似合いだったベージュ色をおすすめしました。それでもまだ少し悩まれているようだったので、後になって気に入らなかった場合の返品交換についてもご案内したところ「親切に接客をしてくれてありがとう」とのお言葉をいただきました。商品だけではなく、接客サービスについてご満足いただけたことが、本当に嬉しかったです。

上海 南京西路店(中国)

王唱さん

2010年、上海は万博の年でした。それに合わせてお店の周辺、南京西路を清掃するボランティア活動を行いました。毎朝9時から1時間ほど、ユニクロのTシャツを着たスタッフ約10人が2カ月わたって毎日清掃を続け、万博の事務局や地元の役所、商店街の人たちなどから「こんなに積極的にボランティアを続けたのはユニクロだけ」と喜んでいただきました。スタッフも近隣の人たちとすっかり親しくなり、今ではお互いに「おはようございます」とあいさつをする関係です。

UNIQLO Soho Broadway  
Flagship店(アメリカ)

ロベルト・リードさん

ニューヨークのソーホーという場所柄、スーツに身を包んだビジネスマンのお客様もたくさんご来店されます。その中には、店内に並ぶ商品の品質を確かめて「奇跡的な価格だね」と微笑んで、何度も来てくださる方もいます。ユニクロのビジネスの正直で一生懸命なところが私は好きです。ウソをつかない、失敗を恐れないところも。去年、娘が生まれて、今、9カ月になります。この子には、この仕事で学んだことをしっかり伝えたいと思います。

全世界の従業員数

約 **40,000** 人

ロシアのユニクロアトリウム店オープンの様子

## 服のチカラの行方

お客様のもとで不要になった服をお預かりし、世界の難民・避難民にお届けする「全商品リサイクル活動」。

2006年に開始し、2011年3月からは韓国を皮切りに全世界への展開もはじまります。2010年は、6月に起きた紛争の結果、多くの国内避難民が発生したキルギス共和国へ。気温がマイナス20度にもなる冬が訪れる前にという切実な願いを受けて、約36万着の衣料をお届けしました。

### ラフマット！（ありがとう）と笑える日。

「冬が来る前に、完成させたいんだ」。2010年11月、晩秋のキルギス共和国の国内避難民キャンプ。あとは屋根と外壁を待つだけに仕上がった家の前で、見覚えのある服を着た男性、ラスロフ・トールフさんが笑っていた。間違いない。ユニクロが寄贈した衣料の中の一着だ。6月中旬の紛争直後から、UNHCR（国連難民高等

弁務官事務所）を中心とする支援プロジェクトはスタート。その中で、ユニクロが衣料の支援を決定したのは7月。ニーズの調査にもとづき9月末から36万着の衣料配布が開始された。「大工仕事をしていると汚れるのだけれど、リバーシブルだから便利でありがたい」。工事の手を休めて、彼は言う。でも、彼は大工ではない。復興支援の一環として行なわれている住宅再建プロジェクトで、資材をもらい、建て

方を指導してもらって、家族の帰る家を立てている。1,300戸の家を立てるというプロジェクト。その約7割の資金は日本政府によるものだ。UNHCRや現地NGOを通じて資材や技術が無償で提供される。支援は受けるが、建てるのは自分。ひとつずつ煉瓦を積み、壁を塗り、屋根をふく。彼は、寒さで肺炎になってしまったことが原因で障がい者指定を受けた。もとの仕事（車の修理工）には戻れない。3人の子供がいる。

寄贈数／目標数（世界の難民・避難民の数）

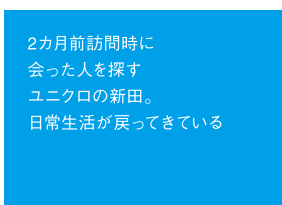
約 **312** 万枚 / **3,000** 万枚

キルギス共和国：通称キルギスは、中央アジアにある旧ソビエト連邦の共和国。首都はビシュケク（旧名フルンゼ）。かつてはキルギスタンという通称が用いられたこともある。1991年ソビエト連邦より独立。独立国家共同体（CIS）の加盟国となっている。

将来はもちろん不安で一杯。「でも、家は自分の目標だからがんばる。家族に寒い思いをさせたくない」。彼は、少しはにかみながら笑った。紛争直後の8月にも訪れているユニクロCSR部の新田幸弘は、彼らの変化に驚きを隠せない。「表情が違うんです。みんな、前を向いて、笑って、歩きはじめています。パソコンをもって当時の写真から8月に会った人を訪ねよう！とまわったんですが、全然違う人に

たどり着いても『ちょっとあがっていきなよ』とか『ご飯、食べていけよ』とか。羊のピラフはちょっとにおいがきつかったな（笑）。でも、みんな普通にユニクロの服を着て、普通に暮らしている。亡くなった人は戻ってこないけれど、居場所がわかり、戻れる人は帰った。まだ、嬉し涙は流れないけれど、悲しくて泣いている人は、もういない」。おだやかに語る眼差しの向こう、路地ではウズベク系の子とキル

ギス系の子、ロシア系の子と一緒に遊んでいる。無邪気な笑顔。「普通に遊べるって、いいですよね」と新田は言う。たった3カ月だけれど、大きな、良い変化が起きている。“お日様ですら泣いている”と6月に子供たちが壁に描いた悲しい絵と言葉。刻まれた文字がまだ残っている街に、ひと足早い春を告げたのは、やっぱり、子供たちの笑顔だった。



紛争で破壊された住宅と、住民たちが自らの手で再建中の家の両方が混在している



紛争時に子供たちが描いた絵と言葉。“お日様ですら泣いている”

# Making the World a Better Place

世界中のどの国、どこの地域の人々にとっても、価値ある企業であるために。  
「本当に良い服」を通じてできることについて考えていきます。

## 社会にとって価値ある 企業であり続けるために

私たちは、服のビジネスを通じて、あらゆる国や地域、社会、人々にとって良い会社、価値ある会社であり続けたいと考えています。そのために、高品質で低価格な商品をお届けするだけでなく、服のビジネスを通じて、世界中の人々を笑顔にしたいと思っています。「世界中の人々」には、ユニクロにご来店いただくお客様はもちろんのこと、パートナー工場で働く従業員、難民キャンプで出会う人々たち、そしてユニクロで働く人々たちも含まれます。私たちの服はMADE FOR ALLの服です。世界中のあらゆる人のための究極の服とは何か。原点に立ち返り、服ができること、その可能性について改めて考えはじめています。

そうした考えの中から生まれたひとつが、バングラデシュにおける「ソーシャルビジネス」です。ユニクロは、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏が総裁を務めるグラミン銀行と協力し、服の企画から生産、販売まで、現地で完結する仕組みを構築しました。働く機会を創出し、人材を育て、そこから生まれた利益は当ビジネスに再投資することで、バングラデシュが抱える貧困や衛生、教育といった社会的課題の解決を目指しています。

私たちの活動は、まだはじまったばかりで、取り組めていないこと、私たちだけではまだ気が付いていないこと、実現不可能なことが多くあります。だからこそ、私たちの想いを発信し、共感していただける人、仲間を増やしていきたいと考えています。衣食住のはじめにくる「服」には、私たちの想像を超えた「服のチカラ」があると信じています。



Vol.01 障がい者と働くということ



Vol.02 HEATTECHが生まれる場所



Vol.03 全商品リサイクル活動



Vol.04 瀬戸内オリーブ基金とユニクロ



Vol.05 ソーシャルビジネスって何だろう？

「服のチカラ」は、ユニクロ店舗で配布しているほか、下記WEBサイトからもご覧いただけます。

<http://www.uniqlo.com/jp/csr/>



バングラデシュで商品の販売を行うグラミンレディ



